

擦文時代の生活

擦文時代（600-1200年）の人々は、祖先たちのように狩猟と採集を続けながら、次第に鮭漁や自給自足の農業にも力を入れるようになりました。彼らは漁場へのアクセスのため川の近くの竪穴式住居に住みました。現在の旭川市周辺の河岸遺跡の発掘調査では、遡上する鮭を捕獲するための築（やな）の痕跡が発見されています。

鮭は食の主要な供給源であっただけでなく、毛皮とともに本州（日本列島の主島）の鉄やその他の資源と交換される重要な交易品でした。擦文時代の人々は、鉄器、織物、粘土製の炊事用かまどなど、本州から新しい技術を取り入れました。鉄器があることで、彼らは土地を

耕し、食生活を補うためにキビや大麦などの耐寒性の穀物を栽培することができました。

擦文時代の人々の交易範囲が広がるにつれ、彼らはサハリン、千島列島、北海道北部のオホーツク海周辺に住んでいたオホーツク人と接触するようになりました。オホーツク人は海岸近くに住み、アザラシ、クジラ、その他の海棲哺乳類を狩猟していました。時が経つにつれて共通の文化が生まれ、一部の考古学者は、オホーツク人と擦文時代の人々との交流がアイヌ文化の形成に影響を与えたと考えています。